

深イ～話!

No.19

東京家庭教育研究所を創設した小林謙策氏(故人)が、家庭における子どもの教育がいかに大切かを身にしみて感じたのは、昭和30年6月、ただ一人の娘に突然、自殺されたときからである。

小林さんは長野で中学校の校長をしていた。

人様の大切な子どもを預かって教育しなければならない立場の者が、自分の娘の教育さえ満足にできなかったのはなぜか。19年間の娘に対する教育のどこが間違っていたのか。平和で楽しかったはずの家庭に突然おそった悲しみ、苦しみが厳しく小林さんを反省させた。

「私は家庭における子どもの育て方に大変な間違いを犯しておりました。」自身が勝気で負けず嫌いだったから、娘に対しても、小さいときから「えらくなれ」といって育ててきた。大きくなると、さらにその上に「人よりえらくなれ」といった。

「娘は小学校、中学校、高等学校までは、自分の思い通りに伸びていったが、東京の大学に行ってから、そうはいきませんでした。あらゆる努力をしても、自分よりすぐれているものが幾多あることを知ったとき、もはやわが人生はこれまでと、生きる望みを失い、新宿発小田原行の急行電車に投身自殺をしてしまったのです」

遺された手紙には

「両親の期待に沿うことができなくなりました。人生を逃避することは卑怯ですが、いまの私にはこれよりほかに道はありません」と書かれ、さらに、「お母さん、ほんとうにお世話になりました。いま私はお母さんに一目会いたい。お母さんの胸に飛びつきたい。お母さん、さようなら」と書いてあった。

「それを読んだ妻は気も狂わんばかりに、子どもの名前を呼び続け、たとえ1時間でもいい、この手で看病してやりたかったと泣きわめくのでした」

考えてみれば、子どもは順調に成長していけば、誰でも「えらくなりたい」と思うもの。這えば立ちたくなり、立てば歩きたくなり、歩けば飛びたくなる。これが子どもの自然の姿だ。

子どもは無限の可能性を持って伸びよう伸びようとしている。

『自分の最善をつくしなさい』小林さんが一人娘の自殺という悲しみのどん底で見つけた真実の言葉。その言葉こそ、人を育てる要諦の言葉である。